

新たな日本語Webコンテンツ

「ライフサイエンス 新着論文レビュー」

ライフサイエンス統合データベースセンター
ライフサイエンス 新着論文レビュー 編集人

飯田 啓介

1



自己紹介

- 1990年 東京農工大学大学院農学研究科
環境保護学専攻 修了, 農学修士
- 1990年 東京化学同人
- 1997年 シュプリンガー・フェアラク東京
- 2004年 共立出版『蛋白質 核酸 酵素』編
集部 (翌2005年より 編集長)
- 2010年より, ライフサイエンス統合データ
ベースセンター 特任技術専門員

2





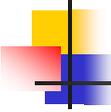
情報・システム研究機構 (ROIS)

ライフサイエンス統合データベースセンター

- ライフサイエンス分野におけるデータベース統合化の拠点を形成することを目的
- 2007年4月 設立
- 国内のデータベースを中心に、データベースの統合化と保全に努め、利便性を高めるための情報技術の開発やポータルを整備を行う
- 統合データベースプロジェクトの中核機関

4

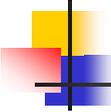




統合データベースプロジェクト

- 文部科学省委託研究開発事業
(2006年度～2010年度)
- 散在する種々の生命科学系データベースや文献などを, ユーザーにとってわかりやすく, 使いやすくしていこうというもの
- さまざまなサービスを無償で提供
<http://lifesciencedb.jp/>

6



新たな日本語Webコンテンツ

First Author's ライフサイエンス 新着論文レビュー

<http://first.lifesciencedb.jp/>

7



ライフサイエンス 新着論文レビュー

ホーム 「新着論文レビュー」とは 編集人 著作権・クレジット

FIRSTAUTHOR'S

エンドサイトーシス経路によるN-カドヘリンの細胞内輸送
は放射状突起にそったニューロンの移動を制御する

2010年9月30日

川内 健史
(慶應義塾大学医学部 解剖学教室)
email : 川内健史

Rab GTPase-dependent endocytic pathways regulate neuronal migration and maturation through N-cadherin trafficking.
Takeshi Kawauchi, Katsutoshi Sekine, Mima Shikana, Kaori Chihama, Kenji Tomita, Ken-ichiro Kubo, Kazunori Nakajima, Yo-ichi Nabeshima, Mikio Hoshino
Neuron, 67, 588-602 (2010)

続きを読む

ジャーナル: Neuron | タグ: レビュー

タンパク質へのセレンの取り込み：その厳密性の分子基盤

2010年9月30日

このサイトについて
トップジャーナルに掲載された日本人を著者とする生命科学分野の論文について、論文の著者自身の執筆による日本語のレビューを、だれでも自由に閲覧・利用できるよう、いち早く公開します。くわしくは「新着論文レビュー」とはをご覧ください。

FOLLOW ME ON [tumblr](#)

最近の記事

- ▶ エンドサイトーシス経路によるN-カドヘリンの細胞内輸送は放射状突起にそったニューロンの移動を制御する
- ▶ タンパク質へのセレンの取り込み：その厳密性の分子基盤
- ▶ HIF-1α量の精密な調節は造血幹細胞の維持に重要である
- ▶ 極端芽細胞からiPS細胞を誘導せず直接的に心筋細胞を構築することに成功



協力者

- 編集人: 飯田 啓介 (DBCLS)
- サイト構築・管理:
中尾 光輝 特任研究員 (DBCLS)
- タイトルデザイン:
岡本 忍 特任准教授 (DBCLS)

9



「新着論文レビュー」とは

- *Nature, Science, Cell*などのトップジャーナルに掲載された日本人を第一著者とする論文について
- 論文の著者自身の手により日本語のレビュー（解説記事）を執筆いただき
- Web上にていち早く無料で公開する



目 標

- 最新の研究成果を, 日本語で, その背景からわかりやすく紹介・解説する
- それらコンテンツの自由な引用・転載・再利用を可能とする
- 生命科学分野のサイエンスコミュニティ全体に寄与することをめざす

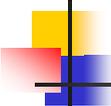
11



対象とする雑誌および論文

- *Nature* 誌およびその生命科学系姉妹誌, *Science* 誌, *Cell* 誌およびその姉妹誌について, 原著論文のうち, 生命科学分野のもので, 筆頭著者が日本人 (筆頭著者と“contributed equally”の場合も含む) である論文を対象とする
- 現在は20誌を対象 (生命科学分野で総説誌を除いたIF上位20誌)

12



対象とする読者

- 広く生命科学全般にかかわる教員・研究者および大学院生・学生
- とくに、生命科学における専門分野が異なる人を意識
- 結果・結論ばかりでなく、前提となる研究の経緯・バックグラウンド、および、将来の展望などもあわせて示す

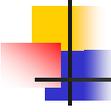
13



公開

- ライフサイエンス統合データベースセンターより、日本語コンテンツのひとつとして公開
- 論文の出版から1か月以内の公開を目標とし、遅くとも2か月以内には公開することとする
- 毎週平均2本以上、年間で100本以上の公開を目標とする

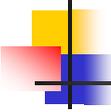
14



著作権とクレジット

- 著作権は, それぞれの著者が保持
- クレジットの明記を条件に, 転載・改変・再利用(営利目的での二次利用も含め)を自由に行える
- クリエイティブコモンズ・ライセンス (CC) 表示 2.1 日本 のもとでライセンス
- 高解像度の図をJPEGファイルとしてダウンロード可能

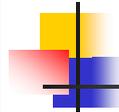
15



分量と図

- 5000字+図2点+参考文献10報が一応の目安. 一般的な和文総説誌において3~4ページに相当する
- 専門外の読者が容易に概略を把握できるよう, 原則として生データは掲載せず, わかりやすいポンチ絵などを添える(著作権の関係から, 原著論文の引用・転載はできない)

16



デモ

実際にWebページをご覧ください

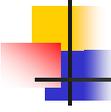
17



公開までのプロセス

- 対象とする雑誌の出版状況をメールアラートやRSSなどで常時チェック
- 対象となる論文が出版されたら、即座に、メールにて執筆依頼
- できたら2週間で執筆いただく
- 原稿受領から2週間で制作・公開
(著者による校正とWeb上での最終確認あり)

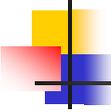
18



「新着論文レビュー」の売りは

- **早い**: 論文の出版から1か月以内の公開を目標としています
- **多い**: 毎週平均2本以上, 年間で100本以上を公開の予定です
- **わかりやすい**: 原稿は一文一文推敲し徹底的に書き直しています

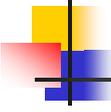
19



誤解をうけやすい点として

- **書き下ろし**です. 原著論文の抄訳などではありません
- **原著論文の執筆者自身が執筆**をしています. 他者によるレビューではありません
- **掲載論文は機械的に選んで**います. とくに選別はしていません

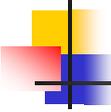
20



誤解をうけやすい点として

- 図はすべて作り直しています. 他の引用や転載ではないオリジナルです
- 原稿そのままではありません. 生命科学専門の編集者が編集をくわえています

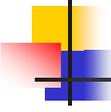
21



とにかく, わかりやすい

“編集”が大事

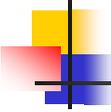
- 原稿そのままでは, とくに専門外の人を読んでわかりやすいものとはならない
- 実際には, 相当に手をくわえる必要がある



一文一文の吟味

- 係り受け（主語と述語の一致）
- 助詞の使い方（てにをは）
- 能動態と受動態（するされる）
- 語順
- 句読点
- 補うべき語, 重複している語
- 文章ごとのつながり

23



“編集”というプロセス

- 編集とは, 専門の第三者がコンテンツを整えその正確性を担保するプロセス
- 書籍・雑誌など紙媒体においては, 編集者が介在し, “編集”というプロセスが機能している
- Webでは“編集”はほとんど機能していないが, このことは, コンテンツの信頼性において大きな問題

24



日本語コンテンツの重要性

- とくに専門領域からやや離れた領域に関して、手っ取り早く情報を得るのは、日本語のほうがはるかにたやすい
- 日本語コンテンツの価値を認め、その流通を促進するしくみが必要

25



コミュニティでの共有と再利用

- これまでの紙媒体は、完全な複製の不可能な“行き止まり”のメディア
- デジタルデータは劣化させることなくコストなしに複製・加工・再利用が可能
- サイエンスにおけるコンテンツは、囲い込んで保護し独占的な利益を生み出すより、コミュニティ全体に公開・共有して広く利益を生み出すようにすべき

26



サイエンスにおける意義

- 学問の細分化が進むなか，研究者と研究者の橋渡し
- 学問が加速度的に発展するなか，新しい知見の紹介

研究者コミュニティにおける
“科学コミュニケーション”において
大きな役割をはたせるはず

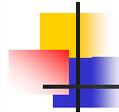
27



統合データベースにおける意義

- 統合
 - “糊”として，データベースをささえ，つなぐ
 - 横断検索
- データベース
 - アーカイブとしての意義・価値
 - データマイニング，日本語コーパス

28



今後の展開

- タグ付け, 検索機能の充実
- テキストマイニング的な機能の追加
- 新着論文のレビューだけでなく, さまざまな種類・性質の日本語コンテンツの公開

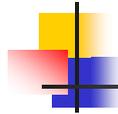
29



問いかけること

- 原著論文あるいは実験データはだれのものか？
- いわゆるアウトリーチ活動はだれがするのか？
- サイエンスの世界に“著作権”はなじむのか？
- 研究活動の出版に営利企業である出版社はどのような役目をはたすのか？

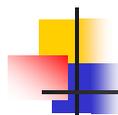
30



アウトリーチ活動の要求

- このセミナーの【背景】にも、「研究者はそれぞれの研究について、内容や成果を分かりやすく発信する取組みを進める必要がある」とある
- 研究者には、ますますアウトリーチ活動が求められつつある
- でも、研究者はみな忙しいし、苦手な研究者も多い

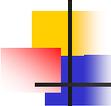
31



アウトリーチ専門家の必要性

- 専門の第三者（コミュニケーターあるいはインタープリター）がアウトリーチ活動を行うような場が必要
- 現実には、そのような場はなかなかない
- 人材自体も、それを生かす場も欠けている

32



コンテンツの信頼性

- これまで良質な日本語コンテンツは、おもに出版社が紙媒体として発信してきた
- Web化の波により、紙媒体以外のコンテンツが大きなウェイトを占めつつある
- “良質なコンテンツ”という点で、出版社の機能は失われつつある
- Web上のコンテンツのクォリティはどのように担保すればいいのか

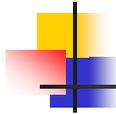
33



編集者はどのようにかわるか

- 原著論文と二次文献、あるいは、英語と日本語にかかわらず、コンテンツの質を維持するためには、その道のプロ（編集者）の手が必要
- コンテンツの電子化・Web化の流れをうけて、そこにどのようなしくみで編集者がかわるか、その費用をどう分担するか、サイエンスコミュニティとして検討すべき

34



謝 辞

ライフサイエンス統合データベースセンター
のみなさん

とくに

高木 利久 前センター長

川本 祥子 特任准教授

坊農 秀雅 特任准教授

中尾 光輝 特任研究員

に心から感謝します

35